

春の教室

山崎 広光

黒板拭きを持ったまま振り返ると
すました顔で先生はこう言った

「黒板の字は消せるが、人生には
消すことのできない過ちというものがある」

あまりにキザなせりふにみんな吹き出した
黒板のどんな字が消されたかは覚えていない
消すことのできない過ちとは何だったのか
もちろん知る由もなかったし、今も知らない

二月も終わりの教室は光と、そして
何かしきりに揺れ動くものが溢れていた
「過ちとは可能性に対する罪のことです
だから春は悲しいんだね」

今度はみなが一様にきよとんとするなかを
次の言葉もなくそのまま先生は授業に戻った
古い列車は通り過ぎ、なずなの花は首を傾げ
風の音は木造の校舎を走り抜けた

年を経ていくうちに分かったことは
経験を重ねるとは心に文字を書き連ねること
そして新しい文字の背後で古い文字が
何か大きな手によって拭ぬぐわれてゆくこと

おそらく拭おうとして拭いきれない文字が
あの時の先生の心の中にはあったのだろう
（もしかしたらどんな人の心にも）それは
過ちとしか呼びようのない書きかけの文字

喜びと言うには辛く

悲しみと言うには懐かしい

そんな文字を知るには幼すぎる子どもらに
春の数多あまたある手が触れている教室だった